

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：13103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25350719

研究課題名(和文) 創作ダンスの授業の問題点とその原理的解明 - 協働学習のモデル領域を目指して -

研究課題名(英文) A Study on Difficulty of Teaching Creative Dance in Physical Education Lesson

研究代表者

大橋 奈希左 (OHASHI, Nagisa)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：90283043

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題の第一の目的は、創作ダンスの授業の問題点を指導者への聞き取り調査を通して明らかにすることであり、第二の目的は、明らかになった問題点を原理的な考察を通して解明することであった。

研究期間前半は、指導経験者を対象に、具体的な授業について聞き取り調査を行った。その結果、学習者が動き始められない実態があることが浮かび上がってきた。一方で、学習者が動ける活動が準備できた場合には、指導の難しさを感じることなく授業が実践されていることが明らかになった。

そこで、研究期間後半は、指導者の研修会において、学習者が動き始めることのできる活動を行い、研修会の内容等についても検討した。

研究成果の概要(英文)：The first purpose of this study is to clarify the difficulty of teaching creative dance in physical education lesson. And second purpose is to consider the difficulty and propose viewpoints for teachers.

The results of this study were as follows: In dance lesson of P. E., students talk about "theme" and "image" all the time. Teaching materials are necessary for moving. In post-war dance education, the object of imitation changes from teacher's demonstration(performance) to student's thought and feeling.

研究分野：身体教育

キーワード：創作ダンス 協働学習 パフォーマンス課題 パフォーマンス評価 表現するからだ

1. 研究開始当初の背景

<制度的な変更と学校現場の実態>

中央教育審議会の答申(2008)では、体育において「集団的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成すること」が示された。

そして、中学校学習指導要領解説保健体育編(2008)では、「ダンスの領域は、従前、第1学年においては、武道又はダンスから男女とも1領域を選択して履修できるようにすることとしていたのを改め、第1学年及び第2学年においては、全ての生徒に履修させることとした。」と明記された。日本の学校教育の歴史の中で、はじめての「中学校男女全員必修」であったといえる。

これらの事態は、表現運動・ダンス領域、中でも創作ダンス(表現)の重視とみることができ、この領域の熱心な指導者にとっては、喜ばしいかぎりであっただろう。一方でダンスの学習に乏しい指導者は、これまで選択等において敬遠してきたダンス領域の指導について、逃れられなくなるという厳しい現実と直面していた。なぜなら、従来から「表現運動・ダンス」は、指導の難しい領域の筆頭に挙げられることも多く、特に、創作ダンス(表現)は、現場の指導者から様々な悩みが聞こえてくるという現実があったからである。

<本研究領域における先行研究の外観>

(1) ダンス教育の思潮と動向に関する研究

第二次世界大戦後、日本の学校におけるダンス教育は、教師による既成作品の指導から生徒の自由な表現活動へと大きな転換を遂げた。その転換で鍵になったのは、「表現性」「創造性」「伝達性」の概念であった(片岡1991)といわれる。そして、それ以降今日に至るまで、男女共修・選択制、体ほぐし・現代的なリズムのダンス(リズムダンス)の導入等様々な制度的変更がありながらも、一貫して「創作ダンス(表現)」の指導が中心におかれてきた。その制度的な変遷については、村田ら(1999)に詳しい。

(2) 表現運動・ダンスの指導の現状と問題点に関する研究

水谷(1975)は、ダンス学習はなぜ嫌われるかについて、生徒と教師の立場から考察していた。一方で、ダンスの授業の現状や実態については繰り返し調査がなされていた(安藤他2003, 寺山2006, 畑野他2010)。安藤らは、学習者にとってのダンス経験や内容の価値を認めながらも授業を実践しない教員がいるという矛盾があることを指摘していた。寺山も、表現運動・ダンスは多くの教員が指導

しにくい領域であり、意義を理解できても指導できない実態を明らかにしていた。その上で、指導する際の困難さの各要因を挙げている。また、ダンス領域内における「創作ダンス」の選択の現状については、中村(2005,2006)によって明らかにされていた。

(3) 創作ダンスの指導法・教材に関する実践的な研究

中学校でのダンス必修化を受けて、モデル単元・指導法の提案や教材の開発が急務であるとの指摘が散見された。しかし、日本女子体育連盟による提案や雑誌「体育科教育」に掲載されてきた典型的な教材に代表されるように、表現運動・ダンス領域についての実践的な研究は継続的に数多くなされてきた。必修化後も、新たなモデル単元や教材も提案されていた(全国ダンス・表現運動授業研究会2011, 菊池2012)。また、ダンスの学習指導や、授業づくりについても、創作ダンスの意義を明らかにしながら、その実践についてのポイントを示している先行研究は多くみられた(三浦1994, 原田2002等)。

2. 研究の目的

前述したように先行研究を概観してみた結果、戦後の学校におけるダンス教育の転換以降、「創作ダンス」の授業が継続的に展開されてきたこと、その中で現場の教員はその意義を認めながらも、指導の難しさを感じていることがわかった。だが、多くの先行研究は質問紙調査によって、対象地域全体の傾向を示していた。そこで、本研究の第一の目的を、「創作ダンス」の授業の問題点について、指導経験のある現職教員を対象として、具体的な授業の事例について、聞き取り調査を通して明らかにすることとした。また、実践研究や教材開発が継続的に行われてきたにもかかわらず、指導の難しい状況が解決されていないことから、原理的な考察を通して問題点を探ることを第二の目的とした。

3. 研究の方法

研究期間の前半は、指導経験のある現職教員を対象に聞き取り調査を行った。

調査では、指導がうまくいかなかった事例を具体的に明らかにすることが目指された。

また、本研究者が現職教員も含む受講者を対象に行った大学院のダンスの授業のレポートについても、本人の了解を得て、「現場で授業を行う上での困難さ」という視点から分析した。

中学校の指導者を対象とした研修会講師の機会を得たことから、開始前に本人の学習経験について調査を行うとともに、の結果

をもとに、難しさを感じずに実践できるための教材を選定して実技を実施し、今後指導できそうな教材について調査を行った。

一方で、聞き取り調査を進めるうちに、難しさを感じずにうまく実践できた事例も出てきたことから、それぞれについて、原理的考察を行った。

研究機関の後半は、の成果をもとに、先行研究の中からモデルとなる教材を作成した指導者を選定し、その指導者が小学生を対象としてモデルとなる教材を実施した授業を具体例として、原理的な考察を行った。

4. 研究成果

現職教員を対象とした聞き取り調査については、研究計画どおり、NG市及びNO市の小学校教員を対象に、「表現運動領域の授業における指導」について聞き取り調査を行った。指導事例について、学年や題材を確認した上で、単元構成や具体的な子どもたちの状況等をデータとして収集した。合わせてF県の現職教員2名にも、同様の聞き取り調査を行った。

それぞれの現職教員の具体例をもとに、指導がうまくいかなかった事例の共通点を探してみると、学習者が「動き」はじめるのに時間がかかったり、「動き」が出てこなかったりしている状況があったことがわかった。また、「題材」や「テーマ」をもとに話し合う時間が長くなっていることが明らかになった。

大学院生対象の授業のレポートを分析した結果、児童・生徒から「動き」が出てくるためには、指導の工夫が必要であり、出てこない場合の方策がない場合には、指導の難しさを感じていることが明らかになった。一方で、学習者同士の間関係が良いか悪いかによって、ダンス領域の指導の難しさが左右されていることがわかった。

中学校の指導者を対象とした講習会の実施前に、指導者の学習者としての表現運動・ダンス領域の学習経験を調査した結果、数は少ないが女性の指導者は、小学校の授業での表現運動の経験はなかった。また、男性の指導者の中には、小・中・高を通して、表現運動・ダンスを経験していない者が2名いた。特定の地域での調査であり、一般化することはできないが、指導者自身の学習経験の少なさも、解決していくべき問題であることが明らかになった。だが、の成果をもとに、受講者の人間関係を築くための教材を導入にし、すぐに受講者が動きはじめられる教材を選定した実技の講習内容は、今後自身の指導でやってみたいという回答を得ることができた。

聞き取り調査の中で、うまくいった指導事例が複数出てきたことから、その共通点を探った結果、どの事例においても、テーマやイメージを吟味するより先に、学習者同士で動くところからはじめていることがわかった。具体的な事例において、学習者たちが一緒に活動するためには、「模倣」によって、広がりや深まりが生まれてきたことから、「模倣」の概念について、原理的な考察を行った。その結果、戦後、学習者の自由な表現活動を標榜した際に、模倣の対象は形あるものから、形なきものになったことが確認できた。

フォークダンスの教材をもとに、動くところから表現へとつながる教材とその実践について考察を行い、学習者のからだの問題について考察を行った。今後も、表現運動・ダンス領域において学習者のどのような「からだ」を育てていくのかを問い直す必要性が指摘できた。

研究開始当初の背景の中で、第二次世界大戦後に大きな転換があったこと、その鍵となる概念が「表現性」「創造性」「伝達性」であったことをみたが、これらと並んで、あるいはこれらの基底に「身体性」の概念があることを再度強調し、見直していく必要があると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

- 大橋奈希左(2015)ダンス教育における「模倣」の意義, 体育哲学研究 第45号, pp. 15-23.
- 大橋奈希左(2015)現職中学校教員を対象としたダンス領域の研修について 受講者の学習経験と講習の内容, 舞踊教育学研究 第16号, pp.25-30.
- 大橋奈希左・原田奈名子(2017)表現運動・ダンス領域における「からだ」を問う, 体育哲学研究 第47号, 全5頁, 印刷中.

〔学会発表〕(計 5 件)

- 大橋奈希左(2013)表現運動・ダンス領域の授業はなぜむずかしいといわれるのか, 日本体育学会体育哲学専門領域夏期研修会.
- 大橋奈希左(2013)現職教員を対象としたダンス領域の研修についての考察, 第33回全国創作舞踊研究発表会.
- 大橋奈希左(2014)表現運動・ダンス領域の授業における「模倣」の意義, 日本体育学会体育哲学専門領域夏期研究会.

- 大橋奈希左(2016) 表現運動・ダンス領域でどのような「からだ」を育てるのか，日本体育学会体育哲学領域夏期研究会.
- 大橋奈希左・原田奈名子(2016)表現運動・ダンス領域における「からだ」を問う，日本体育学会第 67 回大会，体育哲学専門領域一般発表.

6 . 研究組織

(1)研究代表者

大橋奈希左(OHASHI, Nagisa)

上越教育大学大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：90283043